

今を大切に

御津南部小・6 中西 彩七

夏休みに入っすぐのある日、母に祖母から電話がきた。

「あのね、私、今、病院で五時から手術をすることになったから。」

どうやらお腹がすごく痛くなつて家の近くの病院に行ったら、そのまま救急車で市民病院に運ばれて、すぐに手術が決まったらしい。スマホから聞こえてくる声を聞いて、私はどんなみだがあふれてきた。私のもう一人の祖母は四月に急に脳の病気でたおれてしまつて、今も病院に入院している。脳の病気のせいでできない事も多くなり、いろいろと忘れてしまうようになってしまっている。以前とはちがう様子になってしまっている祖母のことが頭にうかび、手術すると聞いて、とてもこわくなってなみだが止まらなかった。私はすぐに病院に向かった。

病室のとびらを開けると、

「あら、来てくれたのね。ありがとね。」

と言つて、座っているいつもの祖母がいた。しかし、病院の服を着て、点てきにながれている姿を見たら、心配でたまらなくなつてきた。午後五時を過ぎて、看護師さんが呼びに来た。私は、車いすに乗つて手術室に向かう祖母を見送つた。

「じゃあね、みなさんごきげんよう。」

祖母はそう言つて、少しにこつとしたけど、私は何も言葉が出てこなくて、笑つて手をふつた。手術が終わるのは夜おそくだったの

で、私は家で待つことになった。母から、

「帰るのはおそくなるから、先にねてなよ。」

と言われていたけれど、気になつて気になつて何度も母にラインで連絡をした。結局、その日は、母が帰ってくるのを待つて、祖母が大丈夫だという話を聞いて安心してからねた。

次の日、電話で祖母と話することができた。私が、

「ばあちゃん、だいじょうぶ。」

と聞くと、

「ううん、だいじょうぶじゃない。」

と答えが返つてきた。私はもちろん痛いのは苦手だけど、この時は、痛さを少しだけもらつてあげることができたらいいと心の底から思つた。それから、毎日のように病院へお見まいに行つた。数日間は苦しそうで、お腹を痛そうにして、元気がなくて、何て声をかけていいのか分からなかった。でも、祖母は自分が苦しいのに、私に、

「来てくれてありがとね。体には気をつけなさいよ。」

と私の体調を気づかってくれた。でも、きっと本当はとても悲しくてつらかつたと思う。なぜなら、祖母は手術で大腸を切ることになつてしまい、ストーマというふくろをお腹にぶら下げて生活することになつてしまったからだ。でも祖母は、前向きだった。傷がまだまだ痛いの、歩いて腸を動かした方がいいと病院の先生に言われて、病院のろう下をあちこち歩いて散歩したりしていた。祖母ががんばつたおかげで、二週間で退院できることになった。

退院の日、母と姉といっしょに病院へ迎えに行つた。久しぶりに、病院の服ではなく、いつも通りの祖母の姿を見て、とても安心した。病院を出ていっしょに車で帰っている時、何でもないふつうのこと

だけど、それがいつもの何倍も何十倍もうれしく思えた。

祖母の家に着き、姉と二人でそうじをしてあげることにした。姉がそうじきをかけて、私はふきそうじをした。祖母は、

「悪いねえ、ありがとね。」

と言い、とても喜んでくれた。そうじの後、みんなでお昼ご飯を食べた。祖母が笑って、

「おいしいね。」

と言って食べているのを見て、ここでもまたふつうのことがとても幸せなことだと感じた。

今回の祖母の入院をきっかけに、私は命の大切さを感じることができた。それに、家族や友達と過ごす毎日が当たり前ではないこと、明日、何か後かいすることがあったとしても、時間を取りもどすことはできないので、「今」を大切にしなければいけないと思った。

私はこれからも祖母といっぱい笑いたい。

「ばあちゃん、私にできることは何でも手伝うね。これからもいっぱい笑って長生きしてね。」